

な ぜ 木 な の か

WOOD DESIGN AWARD STORY BOOK

日本ウッドデザイン協会公式Instagram連載より

毎回の入口は、同じ問い。



なぜ木なのか

ウッドデザイン賞受賞作、7つの物語





カラムツの家@厚真 地元の材で地元の人と作る家

KARAMATSU HOUSE

STORY 01 | 北海道厚真町 | ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野 | WOOD DESIGN AWARD 2025

STORY 01

森のまちに、 木の家がなかった。

「あんなに木がある町なのに、建つ家はどこかのカタログの中にしかない」

北海道・厚真町。面積の7割が森のまちで、設計者の藤田さんはそんな疑問を持っていた。だから、じぶんの家をつくる際、半径5km圏内を見回して仲間を集めた。原木は森に出向いて自分の目で選び、馬が山から木を引き出す。田んぼの沼で水中乾燥させ、バイオマス発電の廃熱で仕上げる。製材所の職人が一本一本の丸太と向き合い、大工が金物を使わない手刻みで骨格を組む。端材は薪ストーブへ。この家は、厚真の木と、厚真の人たちがつくった。その過程こそがデザインである。



一本一本、大工と向き合う製材



金物を使わない手刻みの伝統工法



受賞：ウッドデザイン賞2025 ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野 | カラマツの家
@厚真（北海道厚真町）



なぜからはじまるものづくり

森が面積の70%を占める北の町。なのに、建つ家のほとんどはどこかのカタログの中にあった。



水中乾燥に挑戦

水に沈めることで、脂を抜く。カラマツは、時間をかけて木材になっていく。



バイオマスの廃熱で乾かす

バイオマス発電の廃熱を使い、ビニルハウスで人工乾燥。ハウスは地域の方の提供で、一緒に組み立てた。



地域の文脈を木でつたえる

地震で傷ついた木を、大黒柱として使う。厚真の記憶が、この家の芯になった。

カラマツの家@厚真

「なぜ木なのか」

#なぜ木なのか #ウッドデザイン賞 #wooddesignaward #カラマツの家 #北海道

北海道・厚真町。面積の7割が、森です。

2017年の地震で被災しながらも、林業の担い手が少しずつ増えている。木のプレーヤーが、点在している町。

そのまちに関わり合いを持つ設計者の藤田さんは、こんな疑問を持っていた。

「あんなに木がある町なのに、建つ家はどこかのカタログの中にしかない」

だから、じぶんの家をつくる際、半径5km圏内を見回して、仲間を集めることにした。

原木は、北海道の森に出向き、自分の目で選ぶ。馬が、山から木を引き出す。田んぼの沼で水中乾燥させ、バイオマス発電の廃熱で仕上げる。

製材所の職人が一本一本の丸太と向き合い、大工が金物を使わない手刻みで骨格を組む。

切り落とした端材は、薪ストーブへ。伐った木は、最後まで使い切れる家に。

この家は、厚真の木と、厚真の人たちがつくった。

その過程こそがデザインである。

【受賞のポイント】審査委員会はこの作品を「里山循環を再構築する実践」と評した。川上から川下まで半径5kmで完結する地域材サプライチェーン。かつての里山にあった「近くの木で、近くの人が、家を建てる」という当たり前を、現代によみがえらせた試みでもある。

受賞作品ストーリー 01 カラマツの家@厚真／北海道厚真町

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野／ウッドデザイン賞2025 受賞





ヒノキの草木染め箸 miroku じぶんたちが欲しいものを、毎日の食卓へ

MIROKU

STORY 02 | 鹿児島県 | ハートフルデザイン部門 プロダクツ分野 | WOOD DESIGN AWARD 2025

STORY 02

山に残された、 根元の1メートルから。

「こんなに身近に木があるのに、海外の木に無意識に頼っていた」

鹿児島島の小さな木工所が、ウッドショックで輸入材の入手に困ったとき、足元の木に気づいた。地元の自伐型林業家を訪ねると、建築材にもバイオマスにもならない、根元の1メートルがあった。そのあわい（間）から、箸ブランド

「あわいもの」が生まれた。試した樹種は10近く、削った形を保てたのはヒノキだけ。鉛筆と同じ六角形、先端だけ三角の独自の形は機械では通せず、一膳ずつ手で削る。奄美の泥染めから独学でたどり着いた、藍・茜・ログウッドの三色。仕上げは膜を張らないガラス塗料。使うほどに、デニムのように育っていく。



鉛筆と同じ六角形、先端だけ三角



磨きも下地も、ぜんぶ手のしごと

あわいもの（鹿児島県）上野晃宏・亜美 | ウッドデザイン賞2025 優秀賞（林野庁長官賞）ハートフルデザイン部門 プロダクツ分野





あったらいいな

お箸を使い始める子を持つ親として、子どもと一緒に使いたいと思えるお箸が世の中になかった。



10近い樹種、8割が反った

試した樹種は10近く、8割が反った。使えたのは、ヒノキだった。



ぜんぶ、手のしごと

ペーパーを均一にかけないと、染料が弾かれて色が入らない。手間ひまが光る仕事。



泥染めが、扉になった

奄美の泥染めに箸を持ち込んだら、色が入った。独学で調べ、藍・茜・ログウッドの三色へ。

ヒノキの草木染め箸 miroku

「なぜ木なのか。」

鹿児島県の小さな木工所が、コロナ禍のウッドショックで輸入材の入手に困ったとき、ふと足元に気づいた。「こんなに身近に木があるのに、海外の木に無意識に頼っていた」

地元の自伐型林業家を訪ねると、一本の木のなかに、建築材にもバイオマスにもならない部位があった。まっすぐ通った3メートルにも、その先のチップにもならない、根元の1メートル。そのあわい(間)から、箸ブランド「あわいもの」が生まれた。

試した樹種は10近く。広葉樹は2〜3週間で先端が反り、杉は折れた。削った形をそのまま保てたのは、ヒノキだけ。五重塔の心柱にも使われる、しなりと素直さを持つ木。

最初に作った四角と丸の箸は、マルシェで「割り箸と変わらない」と反応がいまいちだった。鉛筆と同じ六角形に変え、つるりとしたものもつかめるよう先端だけ三角に。この“途中で形が変わる”仕様は、機械では通せない。一膳ずつ、手で削る。

染めを担当するのは、妻の亜美さん。奄美の泥染めワークショップに箸を持ち込んでみたら、色が入った。独学で草木染めを調べ直し、堅牢に発色する藍・茜・ログウッドの三色にたどり着いた。木目が透けて見える、薄衣のような染め。

仕上げは、表面に膜を張らないガラス塗料。木の分子とガラス成分が内側で結合し、素材感を残したまま守る。「木なのにプラスチックのよう」になるのが嫌だった。その感覚が、そのまま箸に宿る。

使うほどに、角から色が抜けていく。デニムのように、手癖のある場所から先に育つ。同じ箸は、ふた膳としてできあがらない。作り手が渡したバトンの、最後の一工程を引き受けるのは、使い手の日々のごはんである。

さいごに、上野さんが教えてくれたこと。「この箸をつくったきっかけは色々ありますが、そもそもは、5歳の娘が箸を使い始めるとき、家族で使えて日常の食卓を彩るお箸がほしいなって思ったことが発端でした」

そう。大切なひとのためにつくったものこそ信じられる。

【受賞のポイント】審査委員会はこの作品を「素朴だが丁寧な仕上げ、多世代で使えるデザインが秀逸な作品」と評した。草木染めによって木の質感はさらに際立ち、三角と六角を組み合わせた独自の形が、持ちやすさを高めている。山に残されていた部位、何度も反った試作、売れなかった最初の箸、泥染めから始まった独学の染め。その紆余曲折こそが、デザインである。

受賞作品ストーリー 02 ヒノキの草木染め箸 miroku／鹿児島県

ハートフルデザイン部門 プロダクツ分野／ウッドデザイン賞2025 優秀賞（林野庁長官賞）

あわいもの（鹿児島県）上野晃宏・亜美

#なぜ木なのか #ウッドデザイン賞 #wooddesignaward #miroku





MOKU-Model 檜原村産ヒノキの木製玩具

MOKU-MODEL

STORY 03 | 東京都檜原村 | ハートフルデザイン部門 プロダクツ分野 | WOOD DESIGN AWARD 2025

STORY 03

木のクルマは、 思いどおりに走る。

「木の温もりを通して、人々に癒しと可能性を届けたい」

幼い頃、祖父からもらった一台の木製トラック。それが、神谷孝弘さんとクルマと木の、最初の出会いだった。世にある木のクルマのおもちゃに満足のものはなく、思い描くおもちゃを自らの手でつくり始める。実車さながらのサスペンションを内蔵し、フローリングから絨毯まで、思いどおりに走るクルマへ。檜原森のおもちゃ美術館で出会った檜原村のヒノキに魅せられ、粗削りは機械に任せ、磨きは手の感覚で一点一点。美しい曲線を描くと、自然に黄金比と白銀比が現れる。木のクルマが思いどおりに走ること。それは当たり前のようであって、おもちゃにとって、もっとも大切なことだった。

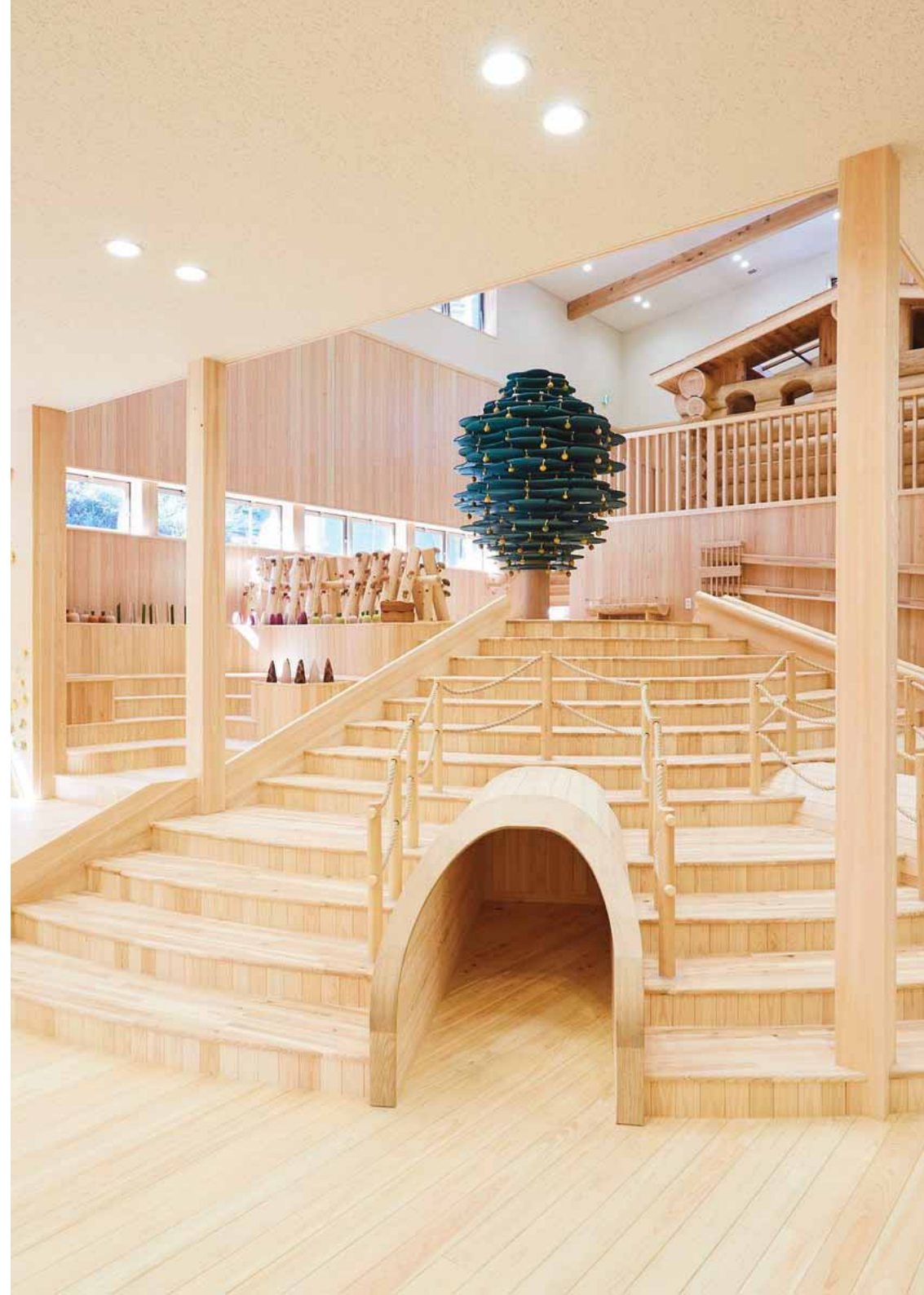


美しい曲線に、黄金比と白銀比が現れる



デジタル時代だからこそ、木のクルマ

神谷孝弘（埼玉県）／MOKU-Model（東京都檜原村産ヒノキほか） | ウッドデザイン賞2025 奨励賞（審査委員長賞） | iF DESIGN AWARD 2026 受賞





こだわりは、ここから始まる

納得のいくおもちゃがない。学生時代から煮詰めた強い想いを、自らの手でカタチにする。



機械から、手のしごとへ

手で描き、機械で切り出し、手で磨く。納得のいく曲線を、自らの感覚を頼りに削り出す。



思い通りの場所に届く

実車を組み上げるように、ひとつひとつ丁寧に組み上げる。一台のクルマに、命が吹き込まれる。



機能と意匠

路面からの摩擦を緩和する木球とサスペンション。絨毯からフローリングまで、思いのままに走破する。

MOKU-Model

「なぜ木なのか。」

幼い頃、祖父からもらった一台の木製トラック。何軒もの百貨店を巡って選び抜かれたドイツ製のおもちゃ。それが、神谷孝弘さんとクルマと木の、最初の出会いだった。

工業デザインを学び、社会に出てからも、納得のいく「クルマ」を作りたい思いはやまなかった。そして、木でつくりたかった。木は、手で削れば手応えが返ってくる。木のなめらかさが、つくり手の手にダイレクトに応えてくれる。

世にある木のクルマのおもちゃに、満足はいくものはなかった。思い描くおもちゃを、自らの手でつくり始める。実車さながらのサスペンションを内蔵し、車輪の形状にもこだわった。フローリングから絨毯の上まで、思いどおりに走るクルマへ。

きっかけは、檜原森のおもちゃ美術館での企画展。檜原村のヒノキ材に魅せられ、作品に取り入れたいと思った。粗削りは木工機械に任せ、磨きは手の感覚で、一点一点。美しい曲線を描くと、自然に黄金比と白銀比が現れる。磨き上げた曲線が、愛着へとつながっていく。木のクルマが思いどおりに走る。それは当たり前のようにいて、おもちゃにとって、もっとも大切なことだった。

デジタルが浸透した時代に、「木の温もりを通して、人々に癒しと可能性を届けたい」と、神谷さんは話す。

神谷孝弘（埼玉県）／MOKU-Model（東京都檜原村産ヒノキ ほか）

【受賞のポイント】審査委員会はこの作品を「木製おもちゃとひとことで片付けることができないほど、本格的で安定した走りに驚く。特にサスペンションの動きが秀逸で子どものみならず大人も魅了される。デジタル主流の時代にあって、木の温もりが嬉しい作品」と評した。趣味で始めた純粋なものづくりが、檜原村のヒノキとの出会いを得て、奨励賞、そして

iF DESIGN AWARD 2026の受賞へと繋がった。制作者の強い思いが、新たな道を切り開く。

受賞作品ストーリー 03 MOKU-Model／東京都檜原村

ハートフルデザイン部門 プロダクツ分野／ウッドデザイン賞2025 奨励賞（審査委員長賞）

神谷孝弘（埼玉県）

#なぜ木なのか #ウッドデザイン賞 #wooddesignaward #MOKUModel





HIBARINGS 森の未来を守り育て循環させるプロジェクト

HIBARINGS

STORY 04 | 広島県庄原市 | ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野 | WOOD DESIGN AWARD 2024

STORY 04

川上から、 動きはじめた。

「このままでは続かない。川上の仲間にも、無理をさせたくない」

広島県・庄原市。フォレストワーカー代表の田村栄太さんの仕事は、森を育て、木を伐り、市場へ送り出す「川上」。自分の伐った木がどこで誰に使われるのかは、分からないままだった。独立して人の3倍働き、売上も伸びた。それでも、ある日気づいた。デザイナーとの出会いから生まれたのがHIBARINGS。倒木した場所に位置情報を残し、年輪は機械でなく、手で数える。丸太の立米単価は1〜2万円が主流のところ、HIBARINGSを通すと高いものは50万円に。家具や豪華客船の内装にも届く。森を守り、育て、使い、また育てる。その循環を、この先1000年へ。



年輪は機械でなく、手で数える



家具やプロダクトに、姿を変えて

HIBARINGS (広島県) / 株式会社FORESTWORKER (広島県) / 千差株式会社 (広島県) | ウッドデザイン賞2024 優秀賞 (林野庁長官賞) ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野





林業の「川上」から「川下」

林業は、森を育て木を伐る川上の仕事。川上の人々は、自分の木が届く先を知らないでいた。



切り株に、IDをつけたら？

川下から「顔が見える木を使いたい」と言われてきた。切り株IDは、デザイナーと生まれた。



木の値段が、変わる

丸太の立米単価は1〜2万円が主流。HIBARINGSを通すと、50万円にも。家具や豪華客船の内装にも届く。



森が、教室になる

県の森づくり事業で、裏山を公園に。小学生が伐採を見学し、東屋もデッキも子どもたちの手で。

HIBARINGS

「なぜ木なのか。」

広島県・庄原市。中国地方の山ふところに、フォレストワーカー代表の田村栄太さんはいる。「川上」の仕事は、木を育てて、伐って、市場へ送り出すこと。そこから先、自分の伐った木がどこで誰に使われているのかは、川上の人には分からないままだった。

田村さんと林業の出会い、リーマンショックの最中、義理の弟の紹介。野球漬けの社会人生活を経て、地元へ戻ったタイミングだった。森林組合に7年半勤めたあと、独立。「これは儲かる」と感じて、人の3倍働いた。売上も伸びた。けれどある日、気がついた。「このままでは続かない。川上の仲間にも、無理をさせたくない」

向きを変えるきっかけは、自伐型林業の中島健三さんとの出会い。半林半Xという働きかた。長く育て、間伐しながら森と長く付き合っていく林業へ、舵を切った。

JR西日本の地域活性化プロジェクトで、デザイナーと出会う。「切り株にトレーサビリティをつけたら？」川下から「顔が見える木を使いたい」という声はあったけれど、川上が自ら声を上げて発信する仕組みは、ほとんど例がなかった。生まれたのが、HIBARINGS。倒木した場所に位置情報を残し、年輪は機械でなく、手で数える。木に関わった人だけに許される、豊かな時間でもある。

価値は、たしかに変わった。丸太の原木立米単価は1〜2万円が主流だったところ、HIBARINGSを通すと、高いものは50万円に。家具や、豪華客船の内装にも届くようになった。木が過ごした時間を大事にすることが、価値を生む。

「川上」が「川下」に歩み寄ると、森と人の距離も近づいていく。広島県の森づくり事業を使って、団地の裏山を公園化するプロジェクトでは、小学生が伐採を見学し、その木で東屋やウッドデッキを自分たちの手でつくる。樹齢70年の木で、古希のお祝いを贈る。子ども

がどんぐりの苗にナンバリングをして、長い時間軸と一緒に育てていく。木と人の時間軸が、ここで交わる。

森を守り、育て、使い、また育てる。その循環を、この先1000年へ。森を守る仕事を、もっと魅力的な生業に。

【受賞のポイント】審査委員会はこの作品を「間伐の際に各樹木にIDを付与し、その木の生まれや育ちを知ることで愛着を持つきっかけを作り出している。木材は多様な素材のなかでも唯一、地域性や記名性を持つものであることを改めて感じさせ、木に積極的に関わり、使う意識を育む良質な取組である。プロダクトやコミュニケーションツールを含めてデザインクオリティが全体的に高い」と評した。川上から始まった小さな動きが、地域性と記名性のある木の価値を立ち上げ、森と人のあいだに新しい関係を編み直しつつある。

受賞作品ストーリー 04 森の未来を守り育て循環させるプロジェクト HIBARINGS／広島県庄原市

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野／ウッドデザイン賞2024 優秀賞（林野庁長官賞）

HIBARINGS（広島県）／株式会社FORESTWORKER（広島県）／千差株式会社（広島県）

#ウッドデザイン賞 #wooddesignaward #HIBARINGS



NISHIGAWA TERRACE (岡山県岡山市) ウッドデザイン賞2025



NISHIGAWA TERRACE 街と山を、木造でつなぐ

NISHIGAWA TERRACE

STORY 05 | 岡山県岡山市 | ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野 | WOOD DESIGN AWARD 2025

STORY 05

街と山は、ひとつの流域でつながっている。

「西川沿いの建物は、木造がいい」

岡山市の中心部、西川緑道公園に面した一画。50年前、当時の市長が二車線の車道を公園に変えた場所である。ここで生まれ育った建築主は、建てるなら木造、とはじめから決めていた。岡山の旭川を上流にたどれば、美作ヒノキが育つ百年の森。街と山は、ずっとひとつの流域でつながっていた。斜めの屋根と中庭を持つ、まちに開いた建物。中庭は雨水循環で育つテラリウム、生ゴミはミズが堆肥に変える、初の都市型循環設計。柱と梁は、まちの製材所のプレス機でつくれる県産材の接着重ね材。テナントはすべて岡山の地元店。一棟の建築がまちにアイデアを投げ、岡山中心部で木造化の研究会が動き出した。



のびのびと、まちに開いた建物



建ててからも、まちを育てる

有限会社ティーハウス（岡山県）／竹下和宏建築設計事務所（岡山県）／株式会社木下洋介構造計画（神奈川県）／株式会社ミナモト建築工房（岡山県） | ウッドデザイン賞2025 奨励賞（審査委員長賞）





緑道から、漏れ出るように

西川緑道公園は、二車線の車道から公園に変えた場所。50年経ち、雑木が育ち、水が流れる。



旭川が結ぶ、街と山

西川は、旭川から水を引く農業用水路。上流をたどれば、百年の森。街と山は、ひとつの流域でつながる。



都市だからこそ、めぐるせる

中庭は、雨水循環で育つテラリウム。生ゴミはミミズが堆肥に変えていく。初の都市型循環設計。



水平展開できる、木造とは

県産ヒノキを積層した接着重ね材。まちの製材所のプレス機で作れる構造。木造の普遍解。

NISHIGAWA TERRACE

「なぜ木なのか。」

岡山市の中心部、西川緑道公園に面した一画。50年前、当時の市長が二車線の車道を一方通行にして、公園に変えた場所。雑木が育ち、水が流れ、市民が憩う公園が、岡山のマチナカで50年かけて育っていった。

建築主は、ここで生まれ育った地元の雄。高校生の頃、緑道公園の整備を目の当たりにし、木造の校舎が次々と鉄筋コンクリートに建て替わる時代を、寂しさとともに見てきた人。だから、「西川沿いの建物は、木造がいい」。建てるなら木造、ということは、はじめから決まっていた。

岡山の中心部を流れる旭川を、上流にたどれば真庭市富原町。美作ヒノキが育つ百年の森に行き着く。江戸時代から、西川は旭川の水を引く農業用水路だった。街と山は、ずっとひとつの流域でつながっていた。流域というつながりを、もう一度たぐりよせる。

斜めに屋根をかけて、建物の中には中庭を。のびのびとして、まちに開いた建物。雪も寒さもない岡山の地域性が、このおおらかさをつくった。

中庭には、雨水循環で育つテラリウム。集めた雨水はビオトープでろ過され、屋上の菜園へ。生ゴミはミミズの力で堆肥に変わっていく。設計はパーマカルチャーデザイナーの四井真治さん。都市型として初めての循環設計。光も雨も生ゴミも、糧にする建築。

柱と梁は、県産材を積層した接着重ね材。大規模工場ではなく、まちの製材所のプレス機でつくれる構造。一方向ラーメンの、木造の普遍解。中小も住宅メーカーも参画できる、水平展開できる木造を、未来へ。

そしてテナントは、すべて岡山の地元店。寿司、ナチュラルワインのビストロ、薪火のフレンチ、イタリアンバル、貸しキッチン、屋上のテラス。建てた建築主自身も、ひとつ店を営んでいる。建ててからもまちを育てていく、まるで森のように。

一棟の建築が、まちにアイデアを投げ、岡山中心部で木造化の研究会が動き出した。木造をまちに増やしていく、その布石がNISHIGAWA TERRACE。岡山のマチナカが、木の街へ。

【受賞のポイント】中小規模一方向ラーメンの木造建築の普遍解とも呼べる作品。無理のない屋根型のデザインもよく、建材の使い方に新規性もある。都市空間への中規模商業施設として波及効果を感じさせる。

受賞作品ストーリー 05 NISHIGAWA TERRACE／岡山県岡山市

ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野／ウッドデザイン賞2025 奨励賞（審査委員長賞）

有限会社ティーハウス（岡山県）／竹下和宏建築設計事務所（岡山県）／株式会社木下洋介構造計画（神奈川県）／株式会社ミナモト建築工房（岡山県）

#なぜ木なのか #ウッドデザイン賞 #wooddesignaward





めぶく 漆の種に願いを託すお弁当箱

MEBUKU

STORY 06 | 福島県会津 | ソーシャルデザイン部門 プロダクツ分野 | WOOD DESIGN AWARD 2025

漆の文化を、 種ごと次の世代へ。

「漆の在り方に、僕自身がハマってしまいました」

福島県・会津。漆器の産地の一画で「漆とロック」を営む貝沼航さんは、漆をひとつの「木の文化」として見つめ直してきた。漆は、ウルシという木から生まれる。一本の木から採れる漆はほんのわずか。いま国産の漆も、漆を採る人も、ウルシの木も減っている。次の世代へ手渡すために生まれたのが、お弁当箱「めぶく」。三つ重ねの信玄弁当に倣い、石川でミズメザクラを挽き、会津の若い職人が漆を塗り重ねる。蓋碗の高台には、ウルシの種がひと粒。売上は会津・猪苗代でのウルシの植栽に充てられる。ひとつの器を買うことが、次の漆の木を植えることにつながっていく。



三つ重ねの信玄弁当に倣ったかたち



使って、お直しして、土に還すまで

漆とロック株式会社（福島県）／平井岳（福島県）／工房雨の木（石川県）／猪苗代漆林計画（福島県） | ウッドデザイン賞2025 受賞 ソーシャルデザイン部門 プロダクツ分野





木に始まる、漆のはなし

漆は、樹木からの恵み。ウルシの木がなくなれば、漆の文化も途絶える。



漆掻きという、仕事

ウルシの幹に傷をつけ、にじむ樹液をかき取る。一本から、わずかな量だけ。



塗り重ねる、時間

漆を塗っては、乾かし、また塗り重ねていく。会津の若い職人の手で。



願いを託す、タイムカプセル

蓋椀の高台の中に、ウルシの種を埋め込む。未来で、芽吹きますように。

めぶく

「なぜ木なのか。」

福島県・会津。古くからの漆器の産地である。その一画で「漆とロック」を営む貝沼航さんは、漆を、ひとつの「木の文化」として見つめ直してきた。2011年の震災で、便利な暮らしのもろさを痛感した。自然のリズムに沿って生きる暮らしを、取り戻したい。その思いが、貝沼さんを漆へと向かわせた。「漆の在り方に、僕自身がハマってしまいました」。

漆は、ウルシという木から生まれる。幹に傷をつけ、にじむ樹液をかき取る。一本の木から採れる漆は、ほんのわずか。いま国産の漆は減り、漆を採る人も、ウルシの木も、少なくなっている。

貝沼さんが個人的に惹かれているのは、縄文という時代。縄文の昔から、日本人は森を育て、漆を使い、器をつくってきた。漆でおおわれた道具は、数千年の時を超えて土の中に残る。漆とは、木と人が交わしてきた、とても長い約束なのだ。

その約束を、次の世代へ手渡すために生まれたのが、お弁当箱「めぶく」である。武田信玄が考案したと伝わる、三つ重ねの信玄弁当に倣った形。木地は、石川・工房雨の木がミズメザクラを挽く。会津では、若い職人が漆を塗っては乾かし、また塗り重ねていく。下の椀にごはん、中におかず、上の蓋を返せば汁椀になる。野でも、ハレの日にも。一汁一菜の器。

この弁当には、ひとつの仕掛けがある。蓋椀の高台の中に、ウルシの種が埋め込まれている。未来で、芽吹きますように。けれど、貝沼さんはこう話す。「うるしの種をプロダクトに添えたのは、実際めぶくかどうか、よりも、『漆文化を繋いでいく』という思いを体現したプロダクトにしたいと思いました」。芽吹くかどうかより、漆文化を次へつなぐという意志を、種が体現している。漆も、種も、未来へのタイムカプセル。

使って、お直して、また使う。長く付き合い、最後は土に還す。そして、この弁当の売上は、会津・猪苗代でのウルシの植栽に充てられる。ひとつの器を買うことが、次の漆の木を植えることにつながっていく。

漆の文化を、種ごと、次の世代へ。それが、めぶくの「なぜ木なのか」への答えである。

【受賞のポイント】審査委員会は、漆の種を埋め込む発想を「漆文化の継承と森林再生を結ぶ象徴的な製品」と評した。修理しながら長く使う仕組みは、利用者の愛着を育み、資源循環の新しいモデルの提示にもつながっている。木を植えるところから、器を仕舞うところまで。漆の一生を、ひとつのお弁当箱が描いている。

受賞作品ストーリー 06 めぶく／福島県会津

ソーシャルデザイン部門 プロダクツ分野／ウッドデザイン賞2025 受賞

漆とロック株式会社（福島県）／平井岳（福島県）／工房雨の木（石川県）／猪苗代漆林計画（福島県）

#なぜ木なのか #ウッドデザイン賞 #wooddesignaward #めぶく #漆 #漆器 #会津 #福島県 #漆とロック #漆の種





信和館 女子陸上部のトレーニング棟

SHINWAKAN

STORY 07 | 京都府京都市 | ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野 | WOOD DESIGN AWARD 2025

STORY 07

木を想像していなかった施主が、木を選んだ。

「なぜ木をご提案いただいたんですか」

最初にそう尋ねたのは、施主のワコールホールディングスだった。5社の提案のうち、木造はただ1社。それでも選んだ理由は、思わず「カッコいい」と唸るデザイン。構造材はすべて京都府産の木。ロゴをモチーフにしたW型の柱と梁、張弦梁構造が10mを超える無柱空間をつくり、燻煙乾燥の木の香りが選手の心身を癒す。企業理念「からだにここに1番に近いところで」。その2番目に近い場所を、木がつくった。



構造材はすべて京都府産の木



W型の柱と梁が支える無柱空間



受賞者：株式会社ワコールホールディングス／株式会社ユウ・コーポレーション／太平工業株式会社／株式会社一級建築士事務所DNA（いずれも京都府） | iF DESIGN AWARD 2026 受賞



なぜ、木なんですか

最初にそう尋ねたのは、施主だった。木と異素材を組み合わせた、「かっこいい」と唸る空間の提案。



Wのかたち

柱と梁が描くのは、ワコールのW。梁をケーブルで支える構造で、10mを超える、柱のない空間に。



特別な木は、使わない

昔ながらの在来工法と、どこでも手に入る一般流通材。ふつうの木で建てるから、技術が続く。



煙で、乾かす

乾燥は、煙でいぶす燻煙乾燥。できるかぎり、自然な方法を選ぶ。木の質感と香りが、選手の心身を癒す。

信和館（トレーニング棟）

「なぜ木なのか。」

京都市。ワコール女子陸上競技部の選手たちが心身を鍛える、トレーニング棟の建て替え計画。5社から提案が届いたが、木造はただ1社だけだった。

「なぜ木をご提案いただいたんですか」。最初にそう尋ねたのは、施主のワコールホールディングスだった。トレーニング施設のイメージの中に、木はなかった。それでも選んだ理由は、木と異素材を組み合わせた、思わず「カッコいい」と唸るデザイン。見たことのない空間が、そこにあった。

木を選ぶ理由は、あとから積み重なっていく。走るのは女子陸上部の選手たち。木の柔らかなたたずまいは、心身を整える場所に合う。京都に生まれ育った会社だから、構造材はすべて京都府産の木。京都府木材協同組合、竹内工務店、藤田木材、京北プレカットの連携で、調達から加工までなめらかに進んだ。

トレーニング室に入ると、ワコールのロゴをモチーフにしたW型の柱と梁が目に入る。梁をケーブルで支える張弦梁（ちょうげんばり）構造が、10mを超える柱のない空間をつくった。使ったのは、昔ながらの在来工法と、どこでも手に入る一般流通材。ふつうの木で建てるから、技術が次へ続いていく。

乾燥は、煙でいぶす燻煙乾燥。できるかぎり自然な方法で加工した木は、視覚、触覚、嗅覚に働きかけ、その質感と香りが選手の心身を癒す。

木を想像していなかった施主が、木を選んだ。その答えは海を越え、世界三大デザイン賞のひとつ、iFデザインアワード2026にも届いた。

ワコールの企業理念は「からだにところに1番に近いところで」。その2番目に近い場所を、木がつくった。

7つの受賞作が、7つの「なぜ木なのか」に答えてくれた、この連載も今回でおしまい。次の答えは、あなたの番かもしれない。ウッドデザイン賞2026の応募は、7月31日まで。

【受賞のポイント】審査委員会は「女性アスリート専用施設として、木材の心理的効果を最大限に活かした設計が秀逸である。温熱・香り・視環境の調整によって心身を支える木質空間を構築し、木材がスポーツ支援に寄与する新たなモデルを示した」と評した。木は、スポーツを支える素材になれる。その最初のモデルが、京都に建っている。

受賞作品ストーリー 07 信和館（トレーニング棟）／京都府京都市

ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野／ウッドデザイン賞2025 受賞

株式会社ワコールホールディングス（京都府）／株式会社ユウ・コーポレーション（京都府）／太平工業株式会社（京都府）／株式会社一級建築士事務所DNA（京都府）

#なぜ木なのか #ウッドデザイン賞 #wooddesignaward #信和館 #京都

な ぜ 木 な の か

次の答えは、あなたの番。 JAPAN WOOD DESIGN AWARD